

自然を理解し調和して生きる縄文文化に 気温上昇に喘ぐ現代文明の意味が問われている

去年、「北海道・北東北の縄文遺跡群」が世界文化遺産に登録され、大湯環状列石と伊勢堂岱遺跡も含まれていた。そこで、縄文のイメージを身近に感じてみたいと、三内丸山遺跡を訪ねたのであった。

遺跡は縄文のムラを再現して、縄文前期から中期（五千九百～四千二百年前）の歴史資料を展示している。復元された堀立柱や竪穴建物の充実した展示形態に感銘を受けるとともに、発掘した資料を解説している「縄文時遊館」に入って、見て読んで歩みを進めるたびに、縄文時代が近付いてくるのであった。

盛土という土器や石器、土偶などが捨

てられ、千年という時を重ねて丘のようになつた場所は、発掘時の状態をキープしていた。盛土を縦1・5メートルほどに切り開いて、断層を見学させているのだ。時代の異なる地層から土器や石器が覗き見えて、ヒスイの玉もこのような状態で発掘されたという。

世界遺産に登録された地域に、弥生以前の文献資料はないが、五千年も経過した縄文のムラに親しみを覚えるのは、私たちの特質だろうか。自然環境は現在と変わらないという。自然を理解し調和して生きる縄文文化に、気温上昇に喘ぐ現代文明の意味が問われている。

資料の中に、五千八百年前につくられた「縄文ポシエット」があった。高さ十六センチ、幅十センチの「網代編み」のポシエットに、半分に分かれていたクルミの殻が見つかったという。漆を塗られ美しく丈夫な籠は、どんな人がつくつたのだろうか。

万物に神が宿るという縄文の思考は、現在日本の基層文化になっている。自給自足を基盤とするつましい生活は、昭和三十年代の高度経済成長期に大きく変わった。大家族で定住し、里山に通つて材料を採取する暮らしは、多少不便に感じられたが、心身を鍛えられるありがたい時代でもあった。